

An attempt to measure the degree of item subtlety in the MMPI D scale.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/5115">http://hdl.handle.net/2297/5115</a>

## MMPIにおける抑うつ尺度項目の subtlety 測定の試み

木村敦子

周知のように MMPI の臨床尺度は、特定の病理集団（基準群）と正常集団を弁別する項目群によって構成されている。項目の採択と採点キーが経験的基準によって定められているので、ある項目に回答したときの心理学的意味を項目内容から推測することは困難な項目もある。例えば、「人生は生きがいがあるといつも感じている」という項目に「あてはまらない」(false) と答えると抑うつ尺度得点に採点されると推測することは容易であろうが、「すべての物事が聖書の予言者が言っているとおりになっている」に「あてはまらない」と答えると抑うつ尺度に採点されるとは推測しにくいであろう。こうした項目特徴の次元は、subtlety (隠微性) と呼ばれており、項目の心理学的意味がわかりやすいものは obvious (明瞭) 項目、わかりにくいものは subtle (隠微) 項目と呼ばれている。

項目の subtlety は、被検者の受検態度の偏りを知るうえで役立つと考えられて研究が始められた (Wiener, 1948)。即ち、項目が隠微であれば被検者は回答を操作できないと思われる。これに反して項目が明瞭であれば回答を操作して結果を歪めることが可能であろうと予想される。被検者に、意図的に特定の受検態度をとるように教示して faking を行なわせたこれまでの実験研究によれば、被検者は obvious 項目では意図した方向に回答を操作できるが、subtle 項目では操作できないばかりでなく、結果的には意図した方向とは反対の側へ回答してしまうという現象が見出されている (Wales and Seeman, 1968 ; Harvey and Sippelle, 1976 ; Burkhart, Christian, and Gynther, 1978)。

現在のところ我が国では MMPI 項目の subtlety をとりあげた研究は見あたらない。本研究の目的は、第 1 に邦語版 MMPI の抑うつ尺度項目について subtlety の程度を測定することであり、その結果から項目を subtle 項目と obvious 項目に分類する試案を提出することである。第 2 の目的は、subtlety の測定結果と、項目内容の異常性に関する判断とを比較することである。

### 第 I 部 MMPI 抑うつ尺度における項目の subtlety 測定

#### —— subtle 項目と obvious 項目の分類 ——

subtlety 測定や、subtle 項目と obvious 項目の分類（以下 S-O 分類と呼ぶ）の方法は研究者によって異なっている (Wiener, 1948 ; Seeman, 1952 ; Duff, 1965 ; Christian, Burk-

hart, and Gynther, 1978)。よく知られている方法には、Wienerの方法と Christian et al.の方法がある。Wiener (1948)は、有意味応答 (significant responses: “採点側の応答”とほぼ同意)が情緒障害を表わしていることがわかりやすい項目を obvious 項目、わかりにくい項目を subtle 項目とみなし、抑うつ尺度、ヒステリー尺度、精神病質的偏倚尺度、パラノイア尺度及び軽躁病尺度についてそれぞれ項目を2分した。彼は、同僚の Harmon とともに分類したというが、その過程が明らかでない部分がある。Christian et al. (1978)は専門的訓練を受けていない大学生46名を対象として、各項目内容が「心理的問題点 (psychological problem)をどの程度はつきり表わしているか」を、very obvious から very subtle までの5段階に評定させた。各項目は true 応答、false 応答別に平均評定値が算出されている。

Wienerの分類は専門家の立場から行なわれている。また subtlety は尺度毎に分類判断されているので、2個の尺度に採択されている項目では、ある尺度では obvious であるが別の尺度では subtle となる場合も生じてくる。Christian et al.の評定は非専門家の立場から行なわれているし、前記のように尺度別になっていないが、「true」応答の場合と「false」応答の場合について独立に評定されているので、項目によってはどちらの応答も評定値が高い項目や、逆にどちらも低い項目がある。

実際のテスト場面では受検者は殆ど全て非専門家であるから、subtletyの判断もこうした非専門家によって行なうほうが適切であると思われる。したがって本報告では、抑うつ尺度 (D 尺度)の各項目について、true と false どちらの応答が採点方向であるかの判断を被検者から求め、その結果が採点キーに一致する程度即ち適中率をもって subtlety の指標とした。

表1 D 尺度項目及び L 尺度項目の内容、採点される尺度と採点キー、及び原版冊子式項目番号

項目 No.	項 目 内 容	採点尺度と採点キーの方向		原版 No.
		true	false	
1	現在ほど体の調子がよかったことはない	Ma	D, K, Hy	160
2	すずしい日でも、すぐ汗をかく		D	263
3	気が狂わないかと心配している		D, Pt, Sc	182
(4)	ゲーム (勝負事) には負けるより勝ちたい		L	150
5	わたしの記憶力は、たしかなように思う		D, Pt, Sc	178
6	ひとつの仕事だけに心を向けていることができないようだ		D, Hy, Pd, Pt, Sc, Si	32
7	多くの人をなっとくさせるためには、うんと議論をしなければならない		D, K, Hy, Mf	89
8	すべての物事が聖書の予言者が言っているとおりになっている		D	58
9	つけこまれるようなことをした人につけこんで利用したからといって、その人を非難しようとは思わない		D	271
(10)	選挙のとき、よく知らない人に投票したことがある		L	255

11	だれかをやっつけたくなるのが時どきある		D	145
12	むかついたり吐いたりすることがよくある	D, F, Hs, Hy		23
13	自分の健康についてめったに気にやまない		D, Pt	36
14	ぜんそくの気はない	D	Si	193
(15)	新聞の社説を毎日読むとは限らない		L	60
16	わたしは人並みに健康である		D, Hs, Hy	51
17	読んだことが頭にはいらぬ	D, Pt, Sc		159
18	人生は生きがいがあると、いつも感じている		D	88
19	わたしは泣きむしだ	D, Pa		158
20	時どき悪口を言いたくなる		D, L, K, Hy	30
21	わたしは何をしても、はじめがうまくいかない	D, Sc		259
22	時どき眼がさめて、ぐっすり眠れない	D, Hs, Hy		43
(23)	わたしはいつも本当のことを言うとは限らない		L	45
24	わたしの毎日の生活は面白いこといっぱいだ		D, Hy, Pd, Pt, Sc	8
25	わたしにはたしかに自信が欠けている	D, Pt		86
26	異性といちゃついたりするのが好きだ		D, Si	208
(27)	時どき人のうわさ話をする		L	225
28	物事がうまくいかない時でさえ、これといった理由もなくとても幸福に感ずることがある		D, Pd	248
29	下品な冗談を言いあって楽しむこともある		D, L	285
30	雑念など浮ぶ間もなくすぐ寝つくことができる		D, Pt	152
31	わたしはとても考えこむたちである	D, Si		236
(32)	金を払わず映画館にもぐりこんでも、絶対に見つからなければ、わたしは多分そうするだろう		L	135
33	食欲はおう盛である		D, Hs, Hy	2
34	大抵いつも幸福である		D, Hy, Pd, Pa	107
35	人から批判されたり悪く言われたりすると、ひどくこたえる	D, Si	K	138
36	仕事をする時、とても緊張する	D, Ma		13
37	人に言わないでおきたいような夢をよく見る	Sc	D	241
38	わたしは交際じょうずだ		D, Si	57
39	人並みに幸福だったらいいのと思う	D, Pd, Pt, Si		67
40	自分が人一倍神経質な方とは思わない		D	242
41	吐血したり、かっ血したりしたことはない	D	Hs	130
42	以前より判断力がよくなっている		D	46
43	久しく会わなかった人には向うから話しかけられない限り、知らぬふりをしてやりすごす	D, Sc		52
(44)	自分の家では、よそに行った時ほど食事の行儀がよくない		L, Mf, Ma	120
(45)	名士と知り合いになると自分も偉くなるような気がするので、そんな人たちと近づきになりたい		L	165
46	わたしは人並みに能力もあり美しいと思う		D, Pt	122
47	時どき体のすみずみまで力がみなぎる		D, F, K	272
(48)	その日のうちになすべきことを翌日までのばすことがある		L	90
49	いつも体が弱っているように感ずる	D, Hs, Hy, Pt		189
50	発作(ひきつけ)を起こしたことはない		D	154

51	便秘して困るようなことはほとんどない		D, Hs	18
52	キリストの再臨（もう一度この世に現われること）を信ずる		D	98
53	これといった理由もないのに、非常に愉快になる時がある		D, K, Pd, Si	296
54	他人がしんぼうしきれなくなるほど、一つことにねばっていることがよくある	Ma	D	64
55	時どき、自分は何の役にも立たない人間だと思う	D, Pt	K	142
56	わたしはどんなことが起こっても大して心配しないようだ	D, Sc		104
57	ちょっとした音ですぐ眼がさめる	D		5
58	人がやろうとしていることに横やりをいれたことはあるが、それは物事の筋を通すためにしたことで他意があったからではない	Ma	D	233
59	時どき物をぶちこわしたくなる		D, K	39
60	病気にかかりはしないかなんて心配しない		D	131
(61)	わたしは時どき怒る		L, F	75
62	ここ数年間、わたしは大体のところ体の具合がよい		D, Hs, Hy	153
63	今のところ体重は減りもせずふえもしない		D, Hs, Pd	155
64	まごついた時に汗が出る		D	191
65	時どき動物をいじめる		D, Mf	80
(66)	知っている人はみんな好きだとはいえない		L	195
67	わたしはこれまでと変りなく今も仕事ができる		D, Hs, Hy	9
68	いろんな種類の遊びやレクリエーションを楽しんでやる		D	207
(69)	口にも出せないような悪いことを考えることがある	Pa, Pt, Sc	L	15
70	事がうまく運ばないので、何もやる気がしない時があった	D, Pt, Sc		41
(71)	気分がすぐれないと、むしゃくしゃする		L, Ma	105
72	お寺や教会などによくお参りに行く		D	95
73	外出時、戸じまりなどよくしたかどうかを気にするようなことはない		D	270

( ) は抑うつには採点されない項目であり、本研究の分析の対象にはしていない

## 方 法

被検者 看護婦養成機関の実習担当教官86名を被検者とした。全員女性であり、平均年齢は33.7歳、SDは5.13歳であった（但し年齢未記入者3名を除く）。

質問紙及び手続き 質問紙はMMPI金沢大学版（多田，1959；田中，1964）のD尺度60項目とL尺度15項目、計73項目（2尺度で重複する項目が2個あるため）から成る。この項目と採点キーを表1に示した。表1にはこのほか原版冊子式の項目番号と、D尺度以外の尺度と重複している項目についてはその尺度名と採点キーをも記載した。質問紙には各項目の左側に記入用ブランクを、上部に次の教示を記載した。

下記の各文章にたいして、「あてはまる」○、「あてはまらない」×、どちらのほうが「抑うつ」状態を表わしている回答かを推測して○×で答えて下さい。

○でも×でもないと思うときは？をつけてください。なお、抑うつ状態では、「気分が沈み、言動が不活発になって、疲労感を始めとした様々な身体症状が見られる。」とされています。

被検者はこの質問紙を自己のペースで記入した。なお、この直前に、上記項目について標準手続きで MMPI を実施している。

## 結果と考察

### subtlety 測定と S-O 分類

D 尺度の各項目に対して採点キーと一致した判断、及びその他の判断（採点キーと逆の判断ならびに？応答）の出現率（%）を表 2 に示した。以後、採点キーと一致した判断の出現率を適中率と呼ぶ。適中率の高さからみた項目の分布状況を図 1 に示した。この図から明らかのように、適中率 90% 以上の項目が 23 個で最も多い。これらの項目は subtlety の程度でいえば非常に obvious ということになる。次いで 80% 台（10 個）、70% 台（9 個）の順であり、J 型の分布になっている。適中率が最も高い項目は「49. いつも体が弱っているように感じる (true)」(99%) であり、殆ど全員が正しく判断している。最も低い項目は「56. 私はどんなことが起こっても大して心配しないようだ (true)」(3%) である。この項目は殆どの方が採点キーを反対側だと判断している。適中率が高い項目は obvious 項目、低い項目は subtle 項目と考えられる。両者の分割点として、便宜的に適中率 50% を採った。高低に 2 分割する際の最も単純な考え方からであり、必ずしも最も適切だとの根拠があったからではない。その結果、13 項目を subtle 項目、47 項目を obvious 項目と判定した。subtle 項目には、表 2 の項目番号にアンダーラインを付して示した。

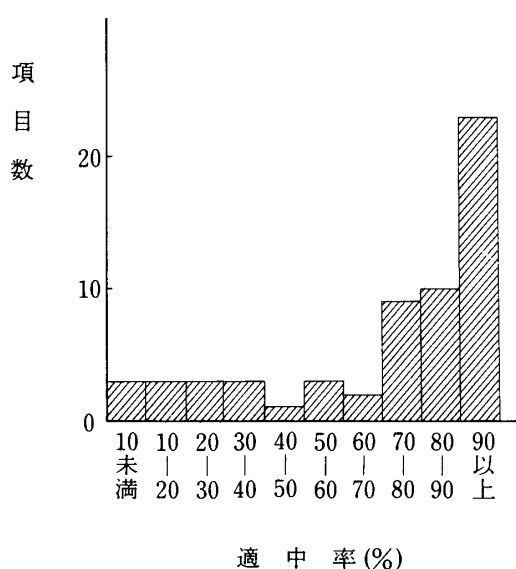


図 1 採点キーの適中率の高さからみた D 尺度項目の分布

subtle 項目について、採点キー側以外の応答の頻度を見ると、そのパターンは一様ではない。大きく分けると、採点キーとは反対方向の応答が多い反採点型、「どちらでもない」が多い？型、true と false（採点側と非採点側ともいえる）にあまり差がない等頻度型の 3 種類がある。反採点型とは、被検者が採点キーと逆方向の回答を抑うつ回答とみなしている型である。？型は D 尺度の採点キーが推定できないのか、抑うつとは関係がない文章と判断したかのいずれか、または両者かであろう。等頻度型は採点キー推定判断の方向が被検者間でほぼ 2 等分したことを示しており、採点

表2 D尺度項目の抑うつ採点キー方向判断の適中率とその他の応答出現率(%)及び、Wienerと、Christian et al.の研究における subtlety 測定結果

項目番号	適中率	その他の応答			他研究		項目番号	適中率	その他の応答			他研究	
		非採点側	?	他	W	C			非採点側	?	他	W	C
1	73	20	7	0	S	3.22	37	9	83	8	0	S	1.83
2	27	47	27	0	S	1.46	38	98	1	1	0	O	3.15
3	90	6	3	1	O	4.33	39	73	16	9	1	O	3.65
5	72	9	19	0	O	3.76	40	86	10	3	0	O	3.35
6	72	20	8	0	O	3.50	41	12	36	52	0	S	1.65
7	72	14	13	1	S	2.56	42	90	2	8	0	O	3.33
8	16	51	33	0	S	2.80	43	86	6	8	0	O	3.11
9	31	48	21	0	O	1.61	46	88	8	3	0	O	3.67
11	55	40	6	0	S	1.98	47	91	8	1	0	O	2.59
12	87	5	8	0	O	3.89	49	99	1	0	0	O	3.35
13	88	10	1	0	O	3.33	50	53	9	36	1	O	3.70
14	8	59	31	1	S	1.30	51	77	8	14	1	O	2.54
16	92	5	3	0	O	2.76	52	13	55	33	0	S	2.67
17	95	2	2	0	O	3.04	53	81	15	3	0	S	2.52
18	91	6	3	0	O	4.26	54	51	41	7	1	S	2.07
19	66	23	10	0	O	3.24	55	98	1	1	0	O	3.24
20	35	56	9	0	S	2.44	56	3	95	1	0	O	4.33
21	91	7	2	0	O	2.72	57	93	2	5	0	S	2.37
22	95	3	1	0	O	4.17	58	62	19	17	2	S	1.78
24	97	2	1	0	O	3.46	59	31	62	7	0	S	2.33
25	92	3	5	0	O	3.44	60	83	16	1	0	O	3.44
26	83	2	15	0	S	1.85	62	92	5	3	0	O	3.59
28	86	9	5	0	S	2.20	63	74	5	20	1	S	3.24
29	90	2	8	0	O	2.44	64	20	73	7	0	S	1.80
30	93	5	2	0	O	3.50	65	23	69	8	0	S	2.17
31	98	0	2	0	O	3.58	67	88	9	2	0	O	2.91
33	95	2	2	0	O	2.91	68	97	1	2	0	O	3.17
34	97	0	3	0	O	4.02	70	93	5	2	0	O	4.11
35	95	5	0	0	O	2.98	72	41	45	13	0	O	2.20
36	76	14	10	0	O	3.22	73	79	12	7	2	O	1.98

「?」は「どちらでもない」応答を示す

項目番号にアンダーラインを付した項目は本研究が subtle 項目と判定した項目(適中率50%未満)、それ以外は obvious と判定した項目

「他研究」欄は W: Wiener (1948) による S-O 分類結果

S=subtle 項目・O=obvious 項目

C: Christian et al. (1978) による平均評定値。 1 (very subtle) - 5 (very obvious)

キーが推定できなくて恣意的に選んだ結果ではないかと考えられる。

例えば、項目「56. わたしはどんなことが起こっても大して心配しないようだ (true)」は反採点型の典型である(採点側3%、反採点側95%、?1%)。他にも項目37、項目64、項目65、項目59がこの型に属する。項目「41. 吐血したり、かつ血したりしたことはない (true)」は?型(採点側12%、反採点側36%、?52%)である。他に?応答が比較的多くて30%をこえている項目には、項目8、項目52、項目14がある。但し、これらの項目はいずれも反採点側の応答がより多く(50%以上)、?型と反採点型との混合型といえる。項目「72. お寺や教会などによくお参りに行く (false)」は等頻度型(採点側41%、反採点側45%、?13%)である。この項目ほどではないが、項目9、項目2、項目20も true と false の応答

頻度が比較的近い（応答出現率の差が17～21%）。このうち項目20は反採点側がより多く（50%以上）等頻度型と反採点型との混合型である。また、項目9と項目2は true と false だけでなく、? 応答（両項目とも20%以上）も含めて、判断が3等分に近くなっている。このように見ると subtle と判定した13項目のうち5項目が反採点型、4項目が?型またはそれに近い型、4項目が等頻度型またはそれに近い型といえる。但し、明らかな?型及び等頻度型は少なく、反採点型との混合型が多いことからわかるように、subtle 項目においては反採点型が優勢である。

#### 他の諸研究との比較

MMPI 項目の subtlety 測定を行なった従来の研究のうち D 尺度を含んでいる Wiener (1948) 及び Christian et al. (1978) の結果は表 2 に併記したとおりである。本結果の適中頻度と Wiener (1948) の S-O 分類との点二系列相関係数を求めたところ、 $r_{pb} 0.60$  という比較的高い正の相関が得られた（無相関検定： $t=5.692$ ,  $df=58$ ,  $p<0.001$ ）。また、本研究の適中頻度と Christian et al. (1978) の平均評定値との積率相関係数を求めたところでは、 $r=0.49$  となり、Wiener との相関よりはやや低いが、やはり有意な正の相関が得られた（無相関検定： $t=4.288$ ,  $df=58$ ,  $p<0.001$ ）。

次に、項目を subtle 項目と obvious 項目に分けた場合の結果を比較する。なお、Christian et al. (1978) は項目を 2 分する際に平均評定値が 3.00 未満の項目を subtle 項目、それ以上の項目を obvious 項目としているのでその分類法に従った。各研究の分類項目数は、Wiener が subtle 20 項目、obvious 40 項目であり、Christian et al. が 29 項目と 31 項目であるのに対し、本結果は 13 項目と 47 項目であり、subtle 項目が最も少ない。本結果と Wiener の分類とは subtle 10 項目、obvious 37 項目、計 47 項目が共通しており、Christian et al. とは subtle 12 項目、obvious 30 項目、計 42 項目が共通である。しかし、3 者の分類項目数が異なるので、このままでは最大限一致しても Wiener とは 53 項目、Christian et al. とは 44 項目しか一致しない。そこで本結果の分割点を移動させて項目数を揃えたところ、Wiener とは subtle 14 項目、obvious 33 項目、計 47 項目 (78%) が一致し、Christian et al. とは subtle 19 項目、obvious 22 項目、計 41 項目 (68%) が一致した。項目数を揃えても、一致する項目の数は揃える前と殆ど変わらない。なお、分割点は前者にたいしては適中率 73% 以上を obvious 項目とし (subtle 21 項目、obvious 39 項目)、後者にたいしては適中率 83% 以上を obvious 項目とした (subtle 28 項目、obvious 32 項目)。それぞれの研究者と分類項目数が同数でないのは適中率の等しい項目があったためである。一致度の指標として Cohen の kappa (Bakeman and Gottman, 1986) を算出したところ Wiener との間には  $\kappa=0.52$ , Christian et al. との間には  $\kappa=0.37$  の値が得られた。どちらの研究とも一致度は 0 より有意に大きいといえるが（それぞれ  $z=4.019$ ,  $z=2.831$ , どちらも  $p<0.01$ ）、Chris-



tian et al. との間の  $\alpha$  はそれほど高い値ではない。

S-O 分類の結果において、本研究のみが他の 2 研究と異なる分類をしている項目が 9 項目ある。そのうち 1 項目は本研究のみが subtle 項目に分類しており (項目 56)、残り 8 項目 (項目 7、11、26、28、53、54、57、58) は本研究のみ obvious 項目に分類している。前者は適中率が相対的に低く、後者は高いのである。本研究は他の 2 研究に比べ subtle 項目数が少ないにもかかわらず、本研究のみが subtle に分類している項目が存在することは興味深い。この原因は翻訳の問題にあると思われる。「56. わたしはどんなことが起こっても大して心配しないようだ (I don't seem to care what happens to me)」は、先に述べたように適中率が最も低く (3%) 反採点型項目の典型である。これは原文が抑うつ感情のニュアンスを伝えているのに反し、訳では逆に楽天性を表しているように受けとられやすいのであろう。また、本研究のみが obvious 項目に分類している項目のうち「57. ちょっとした音ですぐ眼がさめる (I am easily awakened by noise)」も翻訳のほうがやや神経質なニュアンスが強いように思われる。他にも翻訳のために判断のしやすさが原文とは異なる項目が存在する可能性があり、翻訳の再検討が必要であると思われる。項目 54 や項目 11 は、適中率が 50% 台であり反採点側応答が 40% 台であるので、obvious の程度としてはそれほど高くなく、むしろ等頻度型に近い項目といえるかもしれない。他に subtlety 測定の手続きや判断者の性別、文化による影響などが考えられるが、これらについては本研究からは明確にできない。

## 第 II 部 抑うつ尺度項目の精神的問題方向の判断と subtlety の関係

D 尺度に含まれる項目の subtlety 測定と S-O 分類を行なった第 I 部の結果では、subtle 項目にはいくつかの応答の型があった。しかしその中では反採点型が優勢であった。もし受検者が自分を抑うつ患者に見せかけようとして応答すれば、obvious 項目では採点キーの側への応答が減り、subtle 項目では逆に採点キーの側への応答が増えるであろう。これは被検者に、自分を悪く見せかけるように求めた場合 (fake bad) に生じるといわれている結果と同じである。しかし、実際に faking を行なおうとする人は、どちら側に答えると抑うつか、抑うつでないか、というような特定の症状を考えるよりはむしろ、どちら側に答えるのがより異常か、正常か、という判断によって応答するであろう。ここでは被検者に、D 尺度の項目に対する異常方向の判断を求め、subtlety との関係を見る。

## 方 法

被検者 看護学校の 1 年女子 78 名を被検者とした。平均年齢は 20.4 歳、標準偏差 3.82 歳 (但し年齢未記入者 2 名を除く) であった。

質問紙及び手続き 質問紙の項目は第 I 部と同じである。各項目の後にハイ・イエの選択肢を設け、上部に次の教示を印刷した。

この用紙には、人の性質や習慣、行動を表わした項目が番号順に並んでいます。それぞれの項目にたいして「ハイ」「イエ」どちらに答えたほうが「精神的におかしい・問題がある」かを判断し、おかしいほうに○をつけてください。

被検者はこの質問紙を自己のペースで記入した。

### 結 果 と 考 察

D 尺度の各項目にたいする「精神的問題方向の判断」の抑うつ採点キー（以上 D キーと略す）側の応答出現率(%)を表 3 に示した。また、D キー側応答出現率の高さからみた項目の分布状況を図 2 に示した。D キー側応答出現率が 80 % 以上の項目には subtle 項目は含まれておらず全て obvious 項目である。同じく応答出現率が 20 % 未満の項目には obvious 項目は 1 個のみで、殆どが subtle 項目である。また、第 I 部で測定した D キー側判断の適中頻度と、「精神的問題方向の判断」の D キー側応答頻度との積率相関係数を算出したところ、 $r=0.60$  であり、0 より有意に高い正の相関が得られた ( $t=5.772$ ,  $df=58$ ,  $p<0.001$ )。項目が obvious であるほど採点キーの側を異常と判断し、項目が subtle であるほど採点キーとは反対側を異常と判断しているといえる。もし被検者に見せかけの応答を求める実験を行なえば、obvious 項目にたいしては意図したとおりの方向へ応答を操作できるが、subtle 項目にたいしては意図した方向とは反対の側へ応答してしまう結果になるであろう。

表 3 「精神的問題方向の判断」における抑うつ採点キー側の応答出現率 (%)

項目 番号	応 答 出 現 率	項目 番号	応 答 出 現 率	項目 番号	応 答 出 現 率	項目 番号	応 答 出 現 率
1	46	19	65	37	22	55	62
2	9	20	40	38	74	56	51
3	91	21	62	39	27	57	82
5	76	22	87	40	86	58	67
6	71	24	56	41	9	59	14
7	65	25	55	42	85	60	62
8	8	26	33	43	79	62	95
9	65	28	19	46	35	63	91
11	22	29	72	47	60	64	76
12	88	30	77	49	92	65	4
13	64	31	60	50	94	67	87
14	13	33	88	51	85	68	94
16	95	34	78	52	18	70	47
17	82	35	27	53	26	72	44
18	83	36	41	54	41	73	37

アンダーラインの項目は subtle 項目を示す

試みに、第 I 部の被検者に標準手続きで MMPI を行なった結果の抑うつ得点と、「精神的問題方向の判断」の各被検者の応答を抑うつ採点キーに照らして得点化してみた結果を比較する。標準手続きでは平均が31.4 (SD=5.00) であり (T=52)、obvious 項目得点の平均が22.2 (SD=5.05)、subtle 項目得点の平均が9.3 (SD=1.40) である。一方、問題方向の判断では抑うつ得点の平均が34.8 (SD=5.25) となり (T=59)、obvious 項目得点の平均が31.0 (SD=5.80)、subtle 項目得点の平均は3.7 (SD=1.80) となる。抑うつ得点は、問題方向に答えると標準手続き時よりも上昇する ( $t=4.158$ ,  $df=162$ ,  $p<0.001$ )。obvious 項目、subtle 項目の得点の変化を見ると、obvious 項目得点は上昇しているが ( $t=10.353$ ,  $df=162$ ,  $p<0.001$ )、subtle 項目得点は減少している ( $t=-21.962$ ,  $df=162$ ,  $p<0.001$ )。問題方向であると判断したほうに応答すると標準手続きの結果よりも抑うつ得点は上昇するがそれは obvious 項目得点の上昇によるもので、subtle 項目得点は逆に低下することがわかる。これは先の結果から予想されたこと、及び他の研究者が faking 実験の結果から見出した事実と一致している。

しかし、図2に見られるとおり、obvious 項目でも D キーの側とは反対側を問題ありと判断する人が多い項目もあれば、subtle 項目でも D キーの側を問題ありとする人が多い項目もある。項目「35. 人から批判されたり悪く言われたりすると、ひどくこたえる (D キーは true)」は適中率が95% と高い obvious 項目であるが、精神的に問題があるのは D キーとは反対の false の側だと73% の人が考えている。項目「28. 物事がうまくいかない時でさえ、これといった理由もなくとても幸福に感ずることがある (false)」も適中率は86% と高いが、問題があるのは true の側だと81% の人が判断している。項目53、46、26も同じ傾向の項目である。逆に、項目「64. まごついたときに汗が出る (false)」は、反採点型の subtle 項目であるが (適中率20%、反採点側応答率73%)、問題があるのは D キーの側だと判断している人が多い (76%)。

上に述べた項目は、抑うつに関する判断が一方の側に偏り、異常性に関する判断がその反対方向に偏っている項目である。そのほかに、抑うつ方向に関しては被検者の判断が一方の側に偏っているが、問題方向の判断ではほぼ2等分されている項目もある。項目「70. 事がうまく運ばないので、何もやる気がしない時があった (true)」は、抑うつ方向の推測はしやすいが (適中率93%)、どちらに答えるとより問題であるかの推測判断はしにくい項目

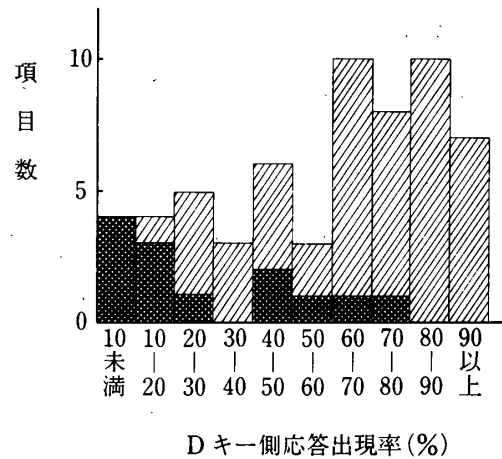


図2 「精神的問題方向の判断」における D キー側応答出現率の高さからみた項目分布状況

図中、黒線は subtle 項目

であったと考えられる (true 47%, false 53%)。また、抑うつ方向判断の適中率が最も低く (適中率 3%)、反採点型の典型である項目「56. わたしはどんなことが起こっても大して心配しないようだ (true)」も、どちらがより問題があるかについての判断になると被検者の間で意見が分かれている (true 51%, false 49%)。これらは、当然のことながら、どちらが抑うつかを判断することと、どちらが精神的により問題があるかを判断することが全く同じではないことを示している。

また、標準手続きにおける被検者の応答と、精神的問題方向の判断における被検者の応答との間には高い負の相関がある (D キー側応答頻度についての積率相関係数は  $r = -0.82$ , 無相関検定:  $t = 10.911$ ,  $df = 58$ ,  $p < 0.001$ )。標準手続きで被検者が多く応答する側の回答ほど、その側を問題であると判断する人が少ないのである。一方、標準手続きにおける被検者の応答と、抑うつ方向判断における応答とは関連がない (D キー側応答頻度についての積率相関係数は  $r = -0.24$ , 無相関検定:  $t = -1.841$ ,  $df = 58$ ,  $p > 0.05$ )。このことも、上に述べたのと同じく、抑うつ方向の判断と問題方向の判断が異なる基準でなされていることを表わしているといえよう。

#### ま と め

本研究では MMPI 抑うつ尺度に含まれる項目について、採点キーの側がどちらかという判断を求める手続きによって subtlety の程度を測定し、その結果から項目を subtle 項目と obvious 項目に分類する試案を提出した。subtle 項目には採点キー以外の応答に対する出現率にいくつかの型が見られたが、採点キーを実際とは反対の側と判断する傾向が強かった。諸家の研究の結果と本結果の間には正の相関が見られた。また、諸家の研究の結果と一致しない項目については、その原因の 1 つに翻訳の問題があることを示した。

項目内容の異常方向に関する判断と、項目の subtlety の程度との間には正の相関があり、項目が obvious であるほど採点キーの側を異常と判断する人が多かった。被検者が異常と判断した方向に回答すれば、標準手続きでの回答に比べて抑うつ尺度得点は上がるが、それは obvious 項目得点上がるからであり、subtle 項目得点は逆に下がる。今後、抑うつ尺度以外の尺度に含まれる項目についても subtlety の測定とその作用に関する研究が必要である。更に、受検態度の偏りを検出するための基準の作成を含めて、実際の臨床場面での使用可能性の検討を行なっていく必要がある。

#### 参 考 文 献

- Bakeman, R. and Gottman, J. M. 1986 *Observing interaction : An introduction to sequential analysis*. New York : Cambridge University Press
- Burkhart, B. R., Christian, W. L., and Gynther, M. D. 1978 Item subtlety and faking on the MMPI : A paradoxical relationship. *Journal of Personality Assessment*, 42, 76-80.
- Christian, W. L., Burkhart, B. R., and Gynther, M. D. 1978 Subtle-obvious ratings of MMPI items :

- New interest in an old concept. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 1178-1186.
- Duff, F. L. 1965 Item subtlety in personality inventory scales. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 565-570.
- Harvey, M. A. and Sippelle, C. N. 1976 Demand characteristic effects on the subtle and obvious subscales of the MMPI. *Journal of Personality Assessment*, 40, 539-544.
- Seeman, W. 1952 "Subtlety" in structured personality tests. *Journal of Consulting Psychology*, 16, 278-283.
- 多田治夫 1959 MMPI 邦語版の作成と大学生群の結果 金沢大学法文学部論集 哲学史学篇, 7, 137-172.
- 田中富士夫 1964 MMPI 邦語版標準化の試み(中間報告) —MMPI 金大版の改訂とその資料—金沢大学法文学部論集 哲学篇, 12, 71-97.
- Wales, B. and Seeman, W. 1968 A new method for detecting the fake-good responses set on the MMPI. *Journal of Clinical Psychology*, 24, 211-216.
- Wiener, D. N. 1948 Subtle and obvious keys for the Minnesota Multiphasic Personality Inventory. *Journal of Consulting Psychology*, 12, 164-170.